

伊勢崎銘仙、復刻にける新たなる挑戦 【伊勢崎織物協同組合】

伊勢崎産地の歴史は古く地場産業として世に出始めたのは15世紀とされる。原料は鬘斗糸（のしいと）・玉糸等を使い草木染めした無地物・縞物の太織（ふとり）で、伊勢崎太織として江湖に広まった。

明治13年に太織業者358名により組合的性格を持った伊勢崎太織会社を設立し、明治19年に伊勢崎織物業組合に改組。また同年組合で本格的に化学染料技術を指導する染色講習所を開設し、明治20年には絹紡糸を導入、明治21年には伊勢崎太織を伊勢崎銘仙と呼称した。明治に入ってからは、括り緋、板締緋、解模様緋、緯総緋、併用緋と多彩な美しい緋技法を研究し取り入れ伊勢崎産地は正に緋の宝庫となった。伊勢崎銘仙は昭和4年には昭和恐慌にもかかわらず年間生産高ではピークの456万反に達し広く大衆に受け入れられた。

明治・大正・昭和と多くの女性に愛された伊勢崎銘仙だが昭和30年代後半からウール緋が主力製品となり、昭和50年には伊勢崎緋が伝統的工芸品に指定され、伊勢崎銘仙は姿を消していった。

約40年近く生産されなかった伊勢崎銘仙だが、アンティーク着物ブームが火付け役となり再び甦ることになった。当産地で過去に生産された伊勢崎銘仙の総数は1億5千万反に達し、大量に古着市場に回り、その斬新なデザイン・鮮やかな色使いが現代の若い女性の間で時代を超えて大人気となった。

そのブームの中で銘仙の古着では物足りない層があった。アンティークを好まない方や、現代女性の体格が当時に比べて向上したことにより、身長差で古着の袖が通せない方等で、新しい銘仙を求める声がかかっての銘仙産地に寄せられた。平成13年に組合では「伊勢崎銘仙復刻プロジェクト」を組合員十数



熊本市での販売会

軒で立ち上げ銘仙復刻に取り組んだ。当産地での生産工程の特色は工程毎に分業化・外注化されていることである。銘仙生産に係る全ての関連業者が存続していたために、40年経ても銘仙復刻が可能であった。伊勢崎銘仙は手作業に依存する工程が多く、凹凸の滑らかな生地のため小さなキズや織りのズレも許されない繊細・緻密な織物である。試行錯誤の末、一年後に商品化が図られ、二年目には軌道にのり今日に至っている。

現在、当産地も大変厳しい状況ではあるが新商品の開発、各種販売会・展示会等へ積極的に参画していくことを考えている。



銘仙振袖発表会



新作銘仙発表会

○問い合わせ先

伊勢崎織物協同組合（五十嵐）

住 所：伊勢崎市曲輪町31-1

T E L：0270-25-2700